

## Robert Browning and "Fra Lippo Lippi"

Yoshio Oro

Robert Browning's "Fra Lippo Lippi", composed in the style of dramatic monologue, has always been considered as one of his masterpieces. This poem is based on the career of the famous painter who lived during the time of the early Renaissance in Italy. The poem has been examined and discussed from an artistic point of view, usually in comparison with the twin poem "Andrea del Sarto." Both of them are primarily concerned with art. In Roma A. King, Jr.'s phrase, "The essentially passive Andrea is married to a beautiful and sensual woman; the virile, masculine Lippo is a monk. Where Andrea fails, Lippo succeeds all too readily. Andrea is debilitated by an emptiness of soul; Lippo is possessed of a powerful upsurge of life (physical and spiritual), which creates tension between his own impulses and the expectations imposed on him by the world."

In many respects these two poems contrast with each other, but they have been treated and discussed as though of the same category. It is from a different point of view, however, that the writer would like to examine "Fra Lippo Lippi."

If this poem is read as a facet of Fra Lippo Lippi's biography, it is strange for us to discover the painter's life superimposed over that of Browning himself. In the poem Lippo is purposefully represented as the first, naturalistic and realistic artist during the time of the early Renaissance. This suggests, as Professor DeVane states, "Browning's view of his own position in poetry in the nineteenth century," which is again designated in his short poem "How It Strikes a Contemporary." Undoubtedly the artistic creed which Fra Lippo Lippi expresses to the guard is representative of Browning's own views and feelings.

Before Browning came to be known, he had as a poetic apprentice experienced many failures in his work composition. His great effort to gain popularity was to use a natural, realistic and colloquial style. Like Lippo who had opposed the mediaeval opinion of the time, such as expressed by his betters and the prior in the poem, so too had Browning when he challenged the conventional romantic poetry of his generation.

The reader will surely find in the Renaissance painter a sympathetic and like character to that of Browning. It is from both the artistic point of view and the autobiographical point of view that we can fully value and appreciate "Fra Lippo Lippi."

## Robert Browning と“Fra Lippo Lippi”

大 呂 義 雄

### I

Robert Browning の優れた研究者 DeVane 氏はその大著 *A Browning Handbook* の中で、1855年9月7日 London の Dorset Street 13番地にあった Browning の家で、詩人たちの一つの集いがあったことを述べている。<sup>1</sup> その詩人たちとは桂冠詩人の Tennyson, Dante Gabriel Rossetti, その弟の William Michael Rossetti, それから Browning 自身と当時すでに著名な女流詩人であった妻の Elizabeth Barrett Browning であった。この席上、Tennyson は自作の *Maud* を朗読し、詩人であると同時に画家でもあった D.G. Rossetti は気付かれないように桂冠詩人をペンとインクでスケッチし、Browning 自身は “Fra Lippo Lippi” を朗読したとのことである。

この詩は1855年11月17日に出版された詩集 *Men and Women* で初めて世人の目に触れたのであるから、その出版に先立つ約二ヵ月前にこの朗読会は行われたのであるが、この作品以外で、たとえば彼自身のもっともお気に入りの詩の一つである、同じく画家を取扱った “Andrea del Sarto” などは晩年に請われるとよく朗読したといわれているのに、なぜこの時は他の作品を取り上げなかったのであろうか。

DeVane 氏は Browning がこのグループに自分の新しい詩の中でも、もっとも大胆にしてかつ自由な詩を読んで聞かせたのは、単なる偶然ではないと前置きして、つぎのように推測している。「おそらく十九世紀中期の詩の正統的な概念に挑戦するのに、これ以上の詩は選べなかったことであろう。」<sup>2</sup>

当時の読者たちは Wordsworth に代表されるロマン派の詩人たちに慣れていて、詩の新しいスタイルである劇的独白を完成させる以前に幾つかの詩劇を書き、殆ど失敗作に終わった彼にとって忘れることのできなかつたのは、感動し、興奮し、拍手喝采をしてくれる観客の熱狂であった。なんとかそれを、今度は劇ではなく詩の形で表現したいと願った彼にとって、人々の関心にもっともよく応えられるような作品を書くということは、日常の生活からかけ離れた口調を用いて、自然の風景に対する興味や、時としては自然崇拜にまで昂揚する感情を詩の中に歌い込んだり、或は想像力の翼に乗って夢幻の境地に遊ぶロマンティックな詩ではなく、もっと現実的な、人間が生きて生活をしている所ならばどこにでもある題材を、日常の会話的な口調で表現することであった。

しかしながら、結果的にこのようなくだけた調子は当時の読者にとって全く唐突で、珍奇なものにさえ感じられたのである。彼にとってこのような口調は、常に彼らに近付くための努力であったにもかかわらず、一般の読者は彼の詩になかなか近付こうとはせず、一方彼の妻の作品 *Aurora Leigh* は1856年に出版されると版を重ね、その結果を彼はむしろ喜ばねばならないという立場に立たされるのであるが、それは兎に角、この “Fra Lippo Lippi” には彼のチャレンジ精神が横溢しており、また彼の詩風を最高に表現している作品として、今日高い評価を受けている。この小論では主人公 Fra Lippo Lippi を通して、Browning のこの精神を考察してみたい。

## II

この詩はBrowningがフローレンスに滞在中、アカデミア美術館で見たLippoの「聖母戴冠」という作品や、ピッティ美術館、ウフィッツィ美術館にあるLippoの作品が契機になったといわれている。Griffin氏とMinchin氏の共著になるBrowningの伝記は、1852年2月に彼が書いていた「より音楽と絵画に富む抒情詩」の一つであると指摘し、<sup>3</sup>またBetty Miller女史の伝記によると、同じ年の4月13日の手紙でBrowning夫人は夫が「ヴァザーリをこつこつと調べている」(digging at Vasari)と書いているとのことである。<sup>4</sup>

十六世紀の伝記作者で「画家列伝」(Le Vite de' Pittori)を書いたVasariによると、このLippoは神に仕える身でありながら放蕩にあけくれる破戒僧であったようで、彼の何にも束縛されたがらない「放蕩無慙な破戒の生活」は高階秀爾氏の名著「フィレンツェ」(中公新書111、pp. 20-22)の中にも詳しく紹介されている。このVasariの筆になるLippoの史実に基いて、Browningはどのようにみずからの詩的想像力を働かせたのであろうか。

この詩はLippoがパトロール中の巡査につかまったところから始まる。季節は春。ものみな眠る真夜中過ぎに夜の女たちが細目に戸を開け放している袋小路でつかまったのである。そのような夜更けならばなおさらのこと警察は怪しい者を熱心に逮捕しようとする。巡査の目には、Lippoの姿形は修道僧のそれであるからして、そのような時間に、そのようないかがわしい場所での彼の振舞いはいかにもうさんくさく、うろんなものに映ったのである。腕を取られたというより、彼は胸倉をつかまれ、そのうえ松明を顔につけつけられて取り調べられる。Lippoの言い分は、自分の行動がいかがわしいというのであれば、彼の所属するカルミネ修道院にふみ込み、そこで別の鼠どもが悪い穴でちっちゃな白鼠と仲良くしているのをひきずり出し、その白鼠どもをキューキュー言わせてやりなさいというのである。

中央公論社出版の「世界の歴史」第七巻117頁には1493年刊行の本の挿絵として、姦通中に剣で刺される修道僧の姿が紹介されており、またつぎのような説明がある。

「僧侶の性的規制の崩壊は見るも無残であった。尼さんは完全に修道僧の専有物になっている。俗人と関係すれば拷問にあうが、僧侶と関係すれば修道士と正式に結婚するか、秘密の上でその関係が保たれる。」

この詩でLippoのいう白鼠どもは必ずしも修道尼とは限らないであろうが、彼の弁明にみられるように、当時の教会の墮落は目に余るものであったらしい。しかしながら一般大衆の精神生活のみならず、現実の生活の中にまで強い権限を持っていた教会の中にはさすがに司直も手が出せない。いささかおじげづいて、胸倉をつかんでいた手もゆるみ、「お前は誰だ？」と尋ねる巡査に、彼はもったいぶって、コジモ・デ・メジチの友人であるとしておきの効果満点の返答をした。

これには巡査も手を離さざるをえない。この時点からLippoの立場は優位に逆転する。胸倉をつかんでいた手はかなり強かったのであろう。彼はさらに「お前さんが縛り首になるとき、こんなふうに首を縛められてどんな気がするか教えてもらいたいものだ。」と啖呵を切った。巡査は謝るが、もちろん自分の方にも弱味があるので、Lippoは腹を立てていない。彼自身や他の多くの画家や文学者たちが庇護を受けている豪勢なMedici家のために祝杯をあげてくれるようにと頼み、部下の者の飲代にと四分の一フローリンを差し出して、すべてを水に流したのである。気が楽になったLippoはすぐに持ち前の画家としての顔が出てくる。

巡査の部下の一人の顔を寸分違わぬユダの顔だと批評したり、別の一人が槍とカンテラを持ち、

仲間を肘でつついている姿を見て、バプテスマのヨハネの首を髪をつかんでぶら下げ、もう一つの手には血まみれの剣をさげている奴隷のようであると観察している。しかも持っているはずがないのに巡査に、チョークか何か木炭のようなものを持っていないかと尋ねる。ここに至って初めて彼が単にLippoと呼ぶ破戒僧でなく、あの有名なFra Lippo Lippiという画家であることが巡査には分る。彼はこれまでにLippoの絵をあちこちで見えて知っており、気に入っていたと述べる。この言葉に嬉しくなったLippoは、「お前さんの目にはきらきらとしたふさわしい輝きがあった。わしは初めからその目付が好きだったよ。」とその鑑賞眼をほめて彼を持ちあげ、二人並んで舗道に腰を下し、メジチ家の館を脱げ出したいきさつを語り始める。彼の態度にはもはや巡査に対する恐れは全くなく、寧ろ、話をする事自体を楽しんでいるかのように陽気に、また有弁に語るのである。

町はカーニバルで浮かれ、毎夜楽隊が町中をねり歩いている時、彼はもう三週間も部屋に閉じこめられて、コジモ・デ・メジチのためにあけてもくれても聖人の絵ばかり描いていた。夜通し描くのはやりきれず、新しい空気を吸うために窓から身をのり出した時、さまざまな足音とともに楽器の音、人々の笑い声、とぎれとぎれの歌声が聞こえてきたのである。それらが街角を曲っていくと直ぐに、月夜にはねる兔のように三人のほっそりした娘がくすくす笑いながらやってくるのが見えた。その中の一人が上を見上げた時、木石ではない生身のLippoは矢も盾もたまらず、カーテンや、シーツ、掛け布、その他あらゆる寝具を引き裂いて梯子を作り、やっとの思いで窓から脱げ出して後を追ひ、サン・ロレンツォ教会の近くで追いついて、すぐに仲良くなったのである。

しかし、彼には描き上げてしまわなければならない仕事があった。それは聖Jeromeが肉慾を抑えるために、大きな丸い石でその貧相な老いぼれた胸を打っている姿である。従って、再びこっそりと館に帰り、寝床にもぐつて一眠りしてからそれを描こうと帰るところをつかまっていた。楽しい思いをしたLippoがこのような絵を描かなければならないというのは、まさに皮肉であるが、彼には余り罪意識はない。巡査にとってLippoは修道院の中で世俗と縁を切り、聖Jeromeのごとく禁欲苦行の厳しい生活を行わねばならない存在であるからして、彼の画家としての立場は理解できても、僧服をまとい剃髪している修行僧としての立場は理解できず、赦し難いのはその点であるとばかりに首を振っているのを見て、つぎに彼は修道僧になった由来を語り始める。

## III

Lippo がまだ赤ん坊の時、両親は死に、彼は路頭に迷うことになった。一、二年はどうかこうにか無花果の皮、メロンの皮、チーズのへた、豆のさや、ごみだめの残飯などを漁り、ひもじい思いをして生きながらえていた。

ある天気の良い霜の降りた日、胃袋は帽子のように空っぽになり、風に吹き折られるように倒れてしまった。彼の父の姉妹である年老いたLapaccia が片手で彼をつかみ、反対の手はいつもの通り彼を叩きながら壁伝いに橋を渡り、近道をして修道院へと連れていった。そこでその月初めてありついたパンを、立ってもぐもぐと食べている間に簡単な交渉が行なわれ、丁度昼食時であったので丸々と肥えた僧が口を拭きながら、彼にこのみじめな俗世間を捨てるかと誓わせる。がんぜない子供にとって世間を捨てるなどということはどうでも良いことであった。目の前に立っている恐らく大鼓腹で、赤く脂ぎった顔の修道僧を見ながら、「お前は捨てるか？」と聞かれた時、Lippo にとってその言葉は口一杯にほおぼったパンを捨てさせられるという意味に解せられ、金輪際捨てるものかと誓い、簡単にいうと、それで修道僧になったのであった。浮世もその見栄や欲も、宮殿や農場、別荘、店や銀行、メジチ家のあわれな慾深か者たちがうつつを抜かしているピカピカの金銀、それらをすべて八歳の時に捨てたのである。しかし、彼にそのうちに分ったことであるが、腹一杯食べて暖いサージの衣をまとい、腰には縄の帯をまきつけ、その上一日中恵まれて怠けておれるのは無償<sup>ただ</sup>ではなかった。

つぎにきた言葉は「この小僧に一体何をさせたものか知らん？」というのであった。修行としては、それは大したものではなかった。修道院の僧たちは大騒ぎをして彼に本を読ませようとしたのである。カトリック教会の中ではラテン語の修得が必須の条件であるのに、彼に分る語は I love に相当する“amo” だけであり、ラテン語の学習は全くの徒労であった。しかし、一見何のとりえもなさそうなこの子供にも、習性となった才能があったのである。Lippo の運命のように、子供が八年も路頭で飢えて人々の顔を見て暮らすと、誰が欲しがっている子供に半分食べかけの葡萄の房を投げてくれるのか、誰がいっしょうけんめいに頼んでいるのにどなったり、蹴ったりするのか、蠟燭をかかげて聖体拝授の式に行進する立派な身りの紳士のうち、誰がウインクをして蠟燭から垂れた蠟を皿に受けさせ、もう一度それを売らせてくれるのか、それとも誰が大声で役人を呼び、むち打ちの罰をくわせるのか見分けられるようになる。いや、それどころではない。どの犬が噛みつき、どの犬が街のごみだめから骨を拾ってくれるのか、やがて分るようになってくる。子供の心も勘も鋭くなり、事物の表情を見分け、飢餓が与える警告のためにますます鋭く研ぎすまされてくる。いつしか彼はそのような観察の集積を、暇を見つけては利用するようになった。即ち、習字帳に人々の顔を描いたり、聖歌集の余白に書きこんだり、ひよろひよろした音譜に手や足をつけたり、A や B の文字に鼻や目や顎をつけてみたり、動詞や名詞のややこしい変化を学ぶ合間に世間の風俗を一連の絵に描いたのである。やがて壁や、椅子や、戸などに手あたり次第に描き、僧たちのひんしゆくをかうようになる。なかにはこの小僧を追い出せという僧まで出てくる。

しかし、修道院は他の宗派に絵画の技量を具えた僧が現われているので、自からの宗派にもそのような僧が現われたら教会堂の正面に装飾を描かせて、善男善女の教化に資することができるかと考え、Lippo にその役割を命じるのである。頭には描きたいことが一杯詰まっっていて、壁は真っ白である。こんなに重荷がおりてほっとすることはない。あらゆる種類の僧、黒のやら白いのや

ら、太ったのややせたのを描いた。つぎに教会に来る人々を描いた。樽からこぼれた酒や、蠟燭のかけらをちよろまかし、それを懺悔しようと待っている善女たち、喘ぎながら祭壇の下に無事に坐っている殺人を犯したばかりの男。彼の周囲は子供たちが取り囲み、そのあごひげや或は被害者の息子が怒りの余り顔面蒼白で、右手は激しく拳を振り上げ、左手はキリストに十字を切っている姿を驚きながら見守っている。つぎに夕方少女がエプロンで顔を隠し、目はすきまからざらざらとのぞかせ、こっそりとやって来て、なにか一言ささやき、パンやイヤリング、花束を差し入れ、かの殺人者はがみがみ言いながら受け取り、やがて彼女は祈りを捧げて立ち去っていく姿を描いた。それらをすっかり描きあげてから、「さあ、いくらでも見てくれ。気に入ったら、もっと描いてやるぞ。」と叫び、壁の梯子を片付け、幕でかくした僧院の壁の一部を見せたのである。周囲に集まった修道僧たちは単純な連中だったので、絵の見方を教えられると、止められるまで声高くほめそやした。「いかにも誰かにそっくりだ。腰をかがめて犬の頭をなでている少年を見ろ。あの女は院長の喘息を看護にくる姪にそっくり。まるで生き写しだ。」

しかし、Lippoの得意も束の間で、わらの火のようにパッと燃え上って、プスッと消える。今度は院長や長老の僧たちが見に来て、顔をしかめ、たちまちすべてを止めさせてしまった。彼らの批評によると、生き写しであることは絵の目的からはずれていることになる。顔や手足、体がまるで瓜二つ本物にそっくりであることは、悪魔の仕業なのである。

彼らにとって画家の務めとは人間のうわべだけを描いて、朽ち果てる肉体を礼讃することではない。肉体を超越し、それを無視し、衆生に肉体のごときものがあることを忘れさせ、魂を描くことであった。従って、絵や色などで驚嘆させることは邪道となり、神を崇める気持を失わせてしまう。そこで院長は「手足に気をとられず、魂を描け。すべてを消して、最初からやり直せ。」と命じたのである。Lippoにとってこれは道理にかなっているとは思えない。彼流に解釈すれば、肉体を下手に描くと眼は見ておられず、別の物を求めても損をしないように魂を描くことが良い方法だということになる。これにはLippoはなっとくできない。彼の心には大きな疑問が生じてくる。

## IV

彼は、画家は肉体と魂の両者を正常な状態で描けば、肉体も本物に似、それとあいまって魂も本物に似てくるのではないかと疑問をなげかける。そこで彼は自分の芸術観を述べる。壁画の中の一番美しい顔は、修道院長の姪の顔で、これがご本尊様だが、美しすぎると喜怒哀楽のどの表情か分らないであろうか。美しさはこれらの表情にも伴うものである。たとえば、彼女の目を本物そっくりに描き、青くしたとしよう。それから一息入れて目を生き生きと輝かせ、魂を入れるとその目は三倍も美しくならないであろうか。彼によると、全く魂のない美しさがあるとして、彼はそんなものを見たことはないが、とに角それがあると仮定して、それを描くと神がお造りになった最も良いものが得られるのであって、それが大切なことなのである。そして神に感謝をする時、それまで見失っていた魂は自らの中に発見できる。それなのに、「消してしまえ！」とは彼にとって合点がいかない。

しかし一口に言うと、彼の身の上はいつもそういうものであったのである。彼は大人であり、もはや子供ではない。戒めも破っている。八歳の子供をつかまえて、女に決して接吻しないなどと誓わせても所詮無駄であり、今は自分自身が一国一城の主で、好きなように絵を描いている。街角のお邸に友人もいる。玄関の鉄輪をしっかりとつかんでいたら良い。その輪は旗を立てたり、馬をつないだりするよりも、その方がよほど役に立つ。しかも、それでいてなお昔の修道院時代のしつけがついて回る。年老いた厳しい顔が、仕事をしているLippoの肩ごしに覗きこみ、あいかかわらず頭を横にふって叫ぶ姿が脳裡から離れない。「お前、それは芸術の墮落じゃ。お前はまだ立派な老練の、ほんものの絵描きではない。僧アンジェリコこそまことの絵描きじゃ。僧ロレンツォに敵うものもおらぬ。肉体を描くことに浮身をやつしては、到底この二人と肩を並べることがかなわぬぞ。」

そう言われると、彼としても腹が立つが怒りをこらえ、歯をくいしばり、口は固くむすんで、彼らを喜ばせるために、時には気に入られることも、気に入られぬこともあったが、絵を描いた。しかし、どんなに努力しても絵ばかり描いてはられない。気分転換が必要である。ある暖かい晩に絵を描いていると、笑い声や叫び声、俗世間のざわめきが聞こえてきた。彼の全心は湧き立ち、生気がみち溢れてきた。そこで不本意ながらこの仕末で、彼は愚かなまねをしてつかまったのである。

しかし、世間の人々は快樂を求めないであろうか。ここでLippoは彼らの偽善を厳しく指摘する。世人は余りに多く嘘をつき、自からを傷つける。大好きなものであっても好きでないといい、自分が欲しいと言ってそれをもらうと、大嫌いなものでも好きだと言うのである。その点Lippoははっきりしていて悟った通りを話していると思う。即ち、彼は常にエデンの園と、そこで人間の妻をお造りになった神を見ている。そして一旦覚えてしまうと、肉体の意義や価値をすこしくらいで忘れることはできない。そして、このようなことを言うからして、自分は獣のように卑しい人間であると自己を十分にわきまえてもいる。

さらにLippoは肉体の美しさのみならず、自然の森羅万象を創造した神のみ心を力強く擁護する。この世の美しさ、不思議、力、物のさまざまな形、色、光や陰、変化、驚異、それらすべては神が造りたもうたのである。それは何のためであろうか。又、この立派な町の姿、かなたに見える川の流れ、周囲の山、頭上の空、それ以上にこれらに囲まれている男や女、子供たちを有り難

く思う人もいれば、思わない人もいるが、これは何のために存在するのであろうか。見逃したり、軽蔑するためか。しっかりと見つめ、驚くためか。勿論、人はこの後の方だと言う。それでは、なぜ口で言うとおりに描かないのか。結果にこだわらないで、なぜありのままに描かないのか。神の造りたもうた森羅万象は余すところなく描かなければ、神に対して罪となる——これが彼の言い分であった。しかし、「横槍はごめんだ。」と前置きして修道院長を初め、他の僧たちが持ち出しそうな異論をつぎのように想像する。「神のみ業は地上では終わり、自然は完全だ。それを再現することは（そのようなことは不可能だが）何の利益があろうか。それなら自然を負かさなければならぬ。」これに対して Lippo は、「我々は今までいくたびも気付かず、見逃してきたものが、描かれたのち初めて好きになるように造られている。だからどちらにしても同じことだが、物は描かれた方が良し、その方が人々にとっても良い。芸術はそのために授けられたのだ。」と反論する。神は我々を用いて各人が知識才能を他人の用に供し、相互に助け合うようになさる。そこで一例として彼はチョーク一本あれば、その巡査の部下の絞首刑になりそうな顔を描き、たとえ今まで気づかなくても、気づかぬところを絵に描いて見せてやろうと言う。同じ道理でもっと崇高なものを描けば、なおさら結構なことだ。神を説くには修道院長の祭壇もいらぬことになる。従って、自分たちが死んでから、後世の人々がそのような仕事をすると思うと、彼には気が気でならない。現世は絵のしみのようなものでもなければ、何も描いていない白地の布のようなものでもない。大いに意味があり、善いものである。その意味を見つけることが彼のかけがえのない仕事なのである。ここでも彼は修道院長が口をはさみ、「その通りだ。しかしお前は人々に祈る心をおこさせぬ。お前が言いたいことははっきりしていても、人々に訴えかけるものがない。それよりも朝の祈りを忘れるな。今度の金曜日にはきつと肉食をせぬように心掛けよ。」と言うであろうと想像する。しかし、勤行のためだけならば、絵はなんの必要もない。頭蓋骨に手足の骨、十字に釘でとめた二本の棒切れ、或は一番良いのは時を知らせる鐘一つ。それで十分である。

Lippo は六ヵ月前、プラトの町で聖ロレンスの絵を描いたがその壁画は申し分のない出来であった。彼は一人の僧に尋ねた。「足場はずしてあるが、わしの絵はどうじゃね。」その僧は「たいしたものじゃ。」と答えた。「火あぶりの刑にされた聖ロレンスの片側が焼けてそれを裏返す三人の奴隷のうち、どの一人として得心がいくほどひっかかれたり、棒でつつかれたりしなかったものはない。信心深い人々が祈りに来たついでに、うっぶん晴しにやったのじゃ。そのうちに下の煉瓦が見えてくるじゃろ。来年の今ごろ、つぎの絵が待たれる。それというのも、人々の間に同情心と信仰心が拡まっているからじゃ。お前さんの絵はその目的にぴったりじゃ！」ここでその言葉を思い出して Lippo は思わず、「くそたわけめが！」と僧にあるまじき悪態をついた。そこで、葡萄酒のキャンティのように、慣れない頭をぐらぐらさせる風を、この刺戟の強い夜に味わって、つい、かんしゃくにまかせて出たたわ言だから聞き流してくれるようにと巡査に頼む。教会をないがしろにしたことが、巡査から誤まって通報されると困るからである。そして彼が罪亡ぼしに、これから描こうとしている聖画の構想を語って、自分が信仰もあり懺悔もしていることをひれきして巡査の情に訴える。

彼が描こうとしているのは彼の傑作「聖母戴冠」の絵である。真ん中に主なる神と幼な子キリストを抱いた聖母マリア、周囲には木の葉や花のように群がる天使、百合の花に衣服、白い顔は真夏の日に教会へ集う貴婦人がイチハツの根を粉にして作ったお白粉をパッパッと吹りかけたように美しい。前面には勿論一人か二人聖人を、例えばフローレンスの守護神聖ヨハネ、修道僧を



記録にとどめ、これに長い寿命を与える聖アンブロジーオ、さらにウズの人ヨブ、彼のような忍耐は画家には必要であるから必ず描き加えなければならない。以上各人各様、熱心に礼拝しているところへ、思いがけず隅から暗い階段を上ってきて、こうこうと明るい光と音楽の中に、さらに話し合っている人々の中へ入りこむのは外ならぬLippo自身である。絵の中の彼はまごまごし、立ちすくみ、目がくらんでいる。彼は地上の人間で、しかも天国に行けそうもないのに、主なる神のみ前でMadonna戴冠の盛儀を拝するなど思いもかけないことだからである。この晴れがましい場所に、彼はまちがえて普段の服装、即ち古びたサージの僧服をまとい、腰には縄の帯をしめて現われている。どこかに身をかくす穴でもないかと探す。すると、美しい天使のようなほっそりとした人が近づいてきて、柔い手をさしのべ、「そんなにお急ぎなさいますな。」と声をかける。そして、神を初め居ならぶ天使、聖人のすべてに話しかける。

「この人は皆々様とは縁もゆかりもない人ですが、皆様を絵に作り、産み出したのです。その聖ヨハネ様は絵をお描きになれますか、ラクダの毛を絵筆に代えて？描いて頂くために私たちはリッポの所へまいります。ここに『彼、この絵を仕上げり。』と書いてあります。」

そこで皆がほほえむと、彼は顔を赤らめ、すべての戸を閉め切り、人々が楽しく「目隠し遊び」をしている時、全く思いがけず、頭から湯気を立てた亭主が現われた時のように、スカートのように広がった多くの天使の翼のかけをくぐり、どうやらうまく逃げ、後のベンチにほうほうの体でたどり着くが、彼女の手、あの危い時に優しい言葉をかけてくれた白合の花のような乙女の手は離さない。

Lippoはこのように構想を語ってから半年後に教会に行ってみるようと巡査に言って、彼に別れを告げる。巡査の明りをかそうという言葉に帰り道は知っているからと断り、握手をする。夜も白み始めてくる。これから又あのいまましい画室へと帰らなければならないからか、それとも時間をお喋りに無駄に費したという後悔の念からか、意味深長な「ちえ！」という言葉でこの詩は終るのである。

Fra Lippo Lippi はBerdoeの *The Browning Cyclopaedia* によると1412年生れとなつて  
いるが、正しくは1406年生まれで、死んだのは1469年である。この時代はルネッサンス初期と言  
われているが、当時フローレンスの大富豪であったコジモ・デ・メジチ (1389—1464) は町のため  
に財産をつぎこみ、町の整備、美化に多くの建築家、画家を雇い、自からの庇護の下においた。  
いわゆるフィレンツェ画派と呼ばれる画家たちは、やがてイタリア各地に招かれて大活躍をし、  
十五世紀後半にはイタリア各都市に新しい芸術運動がおこり百花繚乱の活気を呈してくる。  
Lippoはこのフィレンツェ画派の一人として、特にその奔放な性格と秀でた才能とにより、もっ  
ともコジモの寵愛を受けたのである。

この詩の始まる真夜中を暗黒時代とすると、夜が白みあける明け方は、一日のこうこうと光の  
輝く日中のさきふれとして、まさにLippoの活躍した時代を象徴するのにふさわしい時間構成で  
ある。

この詩の中でLippoの年齢ははっきりしない。カルミネ修道院に連れて行かれたのは八歳とい  
うことになっているが、実際には十五歳ごろであったと考えられている。Berdoeによると、1432  
年まで修道院にいたそうであるからこれは二十六歳くらいである。Lippoのカルミネ修道院での  
修業についても明らかではない。しかし、彼がこの修道院に入れられたことは偶然とはいえ、彼  
にとってまさに好運であった。そこにはブランカッチ礼拝堂があり、その壁画のほとんどはわず  
か二十七歳の短い生涯にもかかわらず、ルネッサンス絵画の先達として不滅の名を残したマサッ  
ッチョ (1401—1428) によって描かれたものであるからである。この礼拝堂の「洗礼を施す聖ペテ  
ロ」、「貢の銭」、「樂園追放」、「影を投げて病人を癒す聖ペテロ」、「共有財産の分配とアナニアの  
死」が特に彼の筆になるものと言われているが、これらの作品はすべて1427年代に描かれたもの  
であるからして、当時同じ修道院で修行中であつたLippoは毎日のようにこの礼拝堂に通つて、  
自分より五歳年上のこの若き天才の仕事ぶりを目のあたりに見、研究して「その画風をすっかり  
身につけてしまったので、人々はマサッチョの霊がフィリッポ・リッピの肉体の中に入りこんだ  
のだと噂し合った」<sup>6</sup>ほどであつたのである。

Browningは当然この詩の中で“Hulking Tom”(のっそりのトム)とこのマサッチョを紹介  
しLippoの弟子としている。これには「Lippoに対するBrowningの偏好から言へば、彼の画風  
の先駆者があると言うことは認め難い事であろうし、この詩の筋から言つても、将来恐るべき彼の  
弟子としてMasaccioを紹介する方が嵌まりがよいと謂ふことは出来る。」とする説もある。<sup>7</sup>  
しかし、ここでは巡査の手前、Lippoは自分をマサッチョの下に置くことはできず、彼の方を自  
分の弟子であるといつて見栄をはっていると解釈できるのではないであろうか。その方がLippo  
の性格の世俗性がより強く印象付けられるであろう。目をざらざらとさせて何一つ見逃さないよう  
にその仕事振りを見ていたのは、寧ろLippoの方であつたであろう。

このマサッチョの画風は「現実の肉体を持った生きた人間の姿が、見事な造形性を与えられて  
堂々と表現されている」<sup>7</sup>ことである。つまり、「透視画法や明暗による肉付法を自由に駆使して、  
重みとヴォリュームのある人間の肉体を現実存在するとおりに描き出す」<sup>8</sup>ことであつた。  
彼のこれらの特徴を学んだLippoはさらに天与の色彩感覚を生かして、マサッチョの色彩をいつそ  
う純化し、強め、さらに巧みな変化を盛りこんだ空間構成には、目を見はらせるものがある。

「光の微妙な交錯のなかに人体の的確な肉付けとみごとな色彩効果で、人間の情感があますとこ

ろなく発揚されて」<sup>9</sup>いるのが彼の特徴であろう。1441年から1447年にかけてサンタンブロージオ大教会のために描いた「聖母戴冠」の壁画はこの彼の画風が完成されたものである。

Browningが見たピッティ美術館の「聖母子」やウフィツィ美術館の「聖母子」もこの円熟期の傑作と言われており、又1452年から1464年にかけてプラト大聖堂内陣に描いた「聖ステファヌスと聖ヨハネの生涯」の壁画群は彼の晩年の最高傑作で、「マサッチオの後継者という名声を恥かじめないだけの見事な表現を持っている」<sup>10</sup>のである。

Browningは才能の面からだけであれば、ルネッサンス初期の画家で他に選ぶべき画家もいたことであろう。しかし、僧職にありながら奔放な一生を送り、数々の奇行や醜聞を残し、宗教的敬虔から離れて、世俗的現世的な情感をたたえた独特の画風を確立し、後代にも大きな影響を与えたLippoをおいて、彼自身の大胆な新しい詩法を表現し得る主人公は存在しなかったのである。

Browningは“How It Strikes a Contemporary”という詩の中で、まるで探偵でもあるかのように、こつこつと杖をついて町の中を歩き廻り、その鋭い眼光は何一つ見逃さないように険しい顔の下で輝き、世の中をかき廻ったり、見詰めたりしている詩人の姿を描いている。この姿は、飢えという状況下で街頭に立ち、世間を必死で見詰めた少年時代のLippoの姿に似ている。

Browningが詩人として持つ日常性や、いかがわしい場所を彷徨したりするLippoに描かれている世俗性は、従来のロマン派の詩には見られなかった新しい要素なのである。conventionalなロマン派の詩風に対抗して、劇的独白という新しい詩法を自からの詩の中に導入し、完成させようとした彼は、修道院長や長老たちが押しつけようとした中世の画風に対し、「怒りをこらえ、歯をくいしばり、口は固く結んで」絵の修行を続けたLippoの姿の中に自からの姿を投映したのである。このような意味においてこの詩は彼の詩の中でも大きな意義を持っていると言えよう。

Notes

1. DeVane, *A Browning Handbook* (New York: Appleton-Crofts, Inc., 1955), pp.25-26, pp. 218-219.
2. Ibid.
3. Griffin & Minchin, *The Life of Robert Browning* (London: Methuen & Co. Ltd., 1910), p. 189.
4. Miller, *Robert Browning, A Portrait* (London: John Murray, 1952), p.187.
5. 高階秀爾、フィレンツェ (中公新書118,1981)、p. 154.
6. *Men and Women* Vo 1. (研究社英文学業書、1956)、pp. 27-28.
7. 高階秀爾、Ibid.
8. Ibid.
9. 万有百科大辞典2美術 (小学館1973) p. 630.
10. 高階秀爾、Ibid.

### Selected Bibliography

- Berdoe, Edward. *The Browning Cyclopaedia*. London: George Allen and Unwin Ltd., 1964.
- Crowell, B. Norton. *A Reader's Guide to Robert Browning*. Albuquerque: University of Mexico Press, 1972.
- DeVane, William Clyde. *A Browning Handbook*, 2nd ed. New York: Appleton-Century-Crofts, 1955.
- Griffin W. H. & Minchin, H. C. *The Life of Robert Browning*. London: Methuen & Co. Ltd., 1910.
- Millier, Betty. *Robert Browning, A Portrait*. London: John Murray, 1952.
- Men and Women* Vol I. 研究社英文叢書 1956.
- 高階秀爾、「フィレンツェ」中公新書118 1981.
- 「世界の歴史7 中世」中央公論社 1979.
- 「週刊朝日百科 世界の美術3 ルネッサンス」 1979.
- 「万有百科大事典2 美術」小学館 1973.